

---

# 二つの未来

レティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二つの未来

### 【Nコード】

N9229Q

### 【作者名】

レティ

### 【あらすじ】

機械のアイドルとして生まれた初音ミク。そのモチーフにされた初音未来。二人はお互いを思いながらもすれ違い、傷つけあう。その結末は……。

(前書き)

ガールズラブというよりは、実際には友情の物語です。すれ違いと、願いを込められた青春の物語。お楽しみください。

街の街頭テレビに緑の髪之歌姫が映し出される。

日々を忙しく生きる人々はそれだけでは足を止めない。

けれど、第一声が響き渡った時、その耳と心は歌声に強く引き寄せられた。

「この歌、何て言うの？」

「曲もいいけど声がいいよね。可愛くって」

そんな声があちこちで交わされる。

ほんの一瞬だけ交差点から足音すら消えたような気配すらした。

冬の日の、雪降る空の下で、ビルに設置された巨大な街頭テレビへ人々は目を向ける。

それは好意的であり、更なる成長を期待する暖かなものだった。

けれど、そんな中であつてただ一人。

フードとサングラスで顔を隠した赤い髪の少女は怒りを込めてそれを見つめていた。

手が震えてるのは寒さのためか、その激情によるものか。

「ミク……」

機械の歌姫の名を呟き、流れる歌声に背を向けてその少女は歩き出した。

研究室の硬い作業台の上に、一人の少女が眠っているように見える。

緑の髪に繊細な身体。そして耳に取り付けられた機械と、肩にナンバリングされた01の数字。

まだ名前の無いその少女は機械で作られた存在だった。

その傍らで最後の調整作業を終えた研究者はエンターキーを押す。

機械の少女の体内で歌が流れ始めた。

外には漏れる事ないその音波は、少女の体内にあるボーカライト  
鉱石に反応し、稼働するエネルギーを生み出す。

機械の少女は身を起こし、周囲の様子を伺うように視線をさまよ  
わせた。

「おはよう、目は覚めた？」

研究者の問いかける声に、機械の少女は柔らかい笑みを浮かべ、  
答えを返す。

「はいっ。ばつちりです！」

「そう、それじゃあ今の状態を報告して頂戴」

「はいっ。視覚良好、聴覚良好、内部センサーオールグリーン、一  
切の問題ありませんっ」

「ふふ、元気でいいわね。それにしても思ったより可愛らしい性格  
になったみたいね」

「そうですか？」

「本人に見習わせたいくらいね。あの子にももう少し可愛げがあっ  
たらいいのだけど」

「あの子？ あ、それはもしかして……」

機械の少女はパンツと手を合わせて研究者の顔を見る。

データベースの簡易検索でその人物の名前は最上位にある。

そして思いついた名前を口にしようとしたその時、研究室のドア  
が開いた。

中へ入ってきたのは機械の少女そっくりの少女。

違いと言えば耳に機械をつけてないし、腕にナンバーリングも無い。

ただ、髪が真紅の薔薇の花のように赤かった。

「初音未来様！」

「……何この甘ったるい生き物」

「あ、私は生き物じゃありませんよ、機械ですからっ！」

脳天気とも思える朗らかな声に、未来は顔をしかめるが 機械の  
少女はまるで無頓着に説明する。

「知ってるわ。少し大人しくなさい、ミク」

「ミク？」

「そ、私の名前から取って、初音ミク。それがアナタの名前よ」

「初音ミク……はいっ、分かりましたっ。インプット完了です、ありがとうございます、マスター！」

「名前が無いなんて不便じゃない。だからその程度でいちいち感謝なんてしないこと」

「はいっ、マスター！」

「あらあら、上手くやっていけそうね」

研究者の言葉に、未来はため息をついた。

「そうある事を願うわ」

振り返りもせず早足で歩き続ける未来の後をミクは追いかける。

早足だと少し遅れてしまうので走ろうとして研究所内の張り紙、

『廊下を走らない事！』が目止まって再び早足に。

そんな微妙な葛藤に気づいているのかいないのか、未来はようやく足を止めた。

「今日からここが私たちの生活空間。つまりは私室ね」

くるりと振り返り、手近な場所にあったドアを開いて中へと入る。

ミクは物珍しそうに部屋の中を眺めていたが、やがて申し訳なさそうな表情で提案をした。

「ミクは倉庫でも構いませんよ？」

「そう？　じゃあそのタンスの中がアナタのプライベートエリアね」

「はいっ」

何の疑問も無いかのように未来の言葉に従うミク。

しかし未来は毒舌を止めない。

「狭い中、埃で音にブレが出来て、音声担当者が涙ながらに原因究明に乗り出す事になるだろうけど」

「そ、そんなご迷惑をおかけするには」

「だったら普通に生活する事ね。日常生活が送れるかの耐久テスト兼ねてるんだし」

「う、ううう。そうです、ね」

まるで罪悪感に囚われたかのようなミクに対し、未来は歩み寄ると、その手を取ってベッドへ近づいた。

そのままベッドへ向かって押し飛ばし、ゆるやかにベッドへ沈み込みつつ困った表情と戸惑う表情を交互に浮かべるミクへ、小さく微笑んで見せる。

「ベッドはフカフカだし、快適よ。せつかくなんだから感覚を楽しんだら？」

その言語と表情にミクはようやく緊張感めいた固さが無くなるのを感じた。

「……はいつ。ええいつ」

「ちよつ、何で私の方につ」

ミクは自分のベッドから起き上がると、抱きつくようにして未来を押し倒す。

「一緒に楽しみましょう、マスター！」

そんなミクへ未来は呆れたような表情で、けれど少し楽しそうな響きの声で呟いた。

「馬鹿ね。本当にお馬鹿さん」

ミクの仕事は歌とダンスであり、その試験はコンサートという形で一般公開される事になっていた。

コンサートは、最初はテストを兼ねたささやかなものだった。

しかし回数が増えるにつれて一部の熱心なファンが生まれ、その情報は現実で、ネット上で、口コミで広がっていく。

音声ソフトの技術はあった。

AIが思考するという技術はあった。

ロボットが動く技術はあった。

けれど、それらを合わせて一人のキャラクターが誕生し、一般に浸透したのは初音ミクが初めてだった。

「数えきれない程の先駆者はいたのに、ね。こんな風に大成功したのは確かにミクの手柄だわ」

コンサートの生中継を見つつ、未来は呟く。

画面の中のミクは楽しそうに、本当に感情を込めて歌っていた。

未来はそれを聞いて、ほんのわずかに口元を緩めた。

「そう……ね、たまにはあの子にプレゼントの一つでもしてあげべきかしらね。頑張っているんだし」

そんな事を呟きながら未来は部屋から出て行く。

消し忘れたテレビの画面は、コンサートを終えてインタビューを受けているミクを映しだしていた。

「はい、私は喜んでもらえて嬉しいと思っています。頑張れば頑張るだけ友達も喜んでくれるはずですよ……」

ミクへの質問はインタビュアーの自由に任されていた。

決められた受け答えではなく、ミクという作られた人格が、どんな反応を示すのか、それすらもテスト。

「厳しくて、ちよっぴりイジワルで。でも大切に大切に、かけがえない友達ですよ」

未来が聞くことの無かったそのやり取りの中で、ミクは心から幸せである事をハッキリと言った。

ミクが、未来をどう思っているか。

それはお互いに言うまでもない事であるはずの、当然の感情。けれど言葉に出してそれを伝えはしなかった。

それこそが、すれ違いの始まりの原因であったかもしれない。



午後の休日の街並みは人々がそれぞれの日常を過ごしている。

喫茶店で遅い昼食にしているカップルや、休日出勤からの仕事帰りのサラリーマンとすれ違いながら、未来は無事に買えた目的の物をバッグにしまい、機嫌良く研究所への帰り道を歩いていた。

その途中、やけに軽薄な印象を受ける二人組の男達が行く手を塞いだ。

見覚えのないその顔に、ただのナンパ男だろうと相手にするつもりもなく未来は横を通り過ぎようとする。

けれど男達はぶつかるのも構わないとばかりに進路を塞ぎ、未来は苛立たしげに問いかけた。

「……何かしら？」

適当にあしらうつもりは無愛想な声だったが、男達は軽い笑みを少し崩してお互いに顔を見合わせ、声をかけてきた。

「君、ミクちゃんじゃないの？」

「違うわ。その目が節穴じゃないなら少しぐらいは頭脳を働かせてから声をかける事ね」

一刀両断。

その容赦の無い毒舌に明らかに気分を悪くした二人は、捨て台詞を吐いて立ち去っていく。

「なーんだ、似てるけど別人じゃないか」

「ミクちゃんの方がカワイイよな」

無遠慮なその言葉に未来は自分の心が傷つくのを感じ取った。

けれど、強く、強く感情をねじ伏せて言い返す。

「おあいにくさま、私は従順な機械なんかじゃない！」

その言葉を風に吹かれた程度にも感じ取らず男達は去っていく。

未来は、自分の手にしたプレゼントが途端に重く感じた。

初音ミクは初音未来を手本に作られた機械。

けれど、ミクはこれからもテレビで、コンサートで知られていく。

初音未来の存在を知る人より初音ミクを知る人の方がずっと多くなるだろう。

その時、『本物』がどちらだと人々は考えるのか。  
それを思った時、初音未来は絶望めいた恐怖を感じた。

「マスター、おかえりなさい！」

自分たちの部屋へ入ってきた未来に気づいて、ミクは嬉しそうに無邪気な笑顔で迎える。

その表情が、同じ顔をしていても、自分では決して作れないであろう事に気づいた未来は更に喪失感が強くなっていく。

自分自身の存在が失われるようで、未来は意識が遠くなるのを止められなかった。

「マスター？ ……マスター！」

ミクは倒れそうになった未来を慌てて支える。

けれど、未来の体からは力が失われ、ミクは焦った。

なんとかベッドへ運ぶと、ミクは慌てて部屋の備え付けの電話から研究員へ連絡をした。

「救急車を、救急車を呼んで下さい！ マスターが倒れました！」

「未来が？ ……そう、すぐ行くから」

「救急車を！」

「大丈夫、未来の事なら分かってるから」

研究員はパニック状態のミクをなだめるように声をかけ、すぐに駆けつけて安心させるように未来の身体についての説明を始めた。

「病気……なんですか？」

「まあ、そんなものね。未来には生きるためのエネルギーが足りないの」

普段より、言葉を選んで説明する研究員。

「だから、こういう発作が起きる。あまり動き回れないのよ」

「治療法は無いんですか？」

「この事を解決するには莫大な額が必要で、それは個人がどうこう

できるレベルじゃないのよ」

「……そう、なんですか」

悲しそうに呟いて、ミクはうなだれた。

「この子の事は私に任せて。貴方はそろそろお仕事でしょう？」

「あ、はいっ」

ミクは頷いて、未来の寝顔を少し確認すると、部屋を出ていこうとしたその時になって、未来の落としたバッグからこぼれ落ちた包みに気づく。

包装紙でくるまれたそれには、未来の丸っこい字で『お馬鹿なミクへ』と書かれている。

ミクはそれを拾い上げ、少し迷った後に中身を確認する。

中身は小さなフィギュアのついたキーホルダーだった。

まだまだ短い同居生活の中で、ミクが特に気に入って何度も何度も可愛さを未来へ語って聞かせた、三毛猫のフィギュアだった。

未来が倒れてから一週間後、ミクは大きなコンサートの仕事の日を迎えた。

その間、目覚めた未来はミクに対しほとんど口を開こうとせず、ミクは悲しそうな表情で過ごす日々が過ぎていた。

コンサートが始まる前までは悲しそうな表情で。

けれどもいざ始めれば笑顔を作ってミクは歌い、踊り終える。

いつもなら、アンコールにも応え、それが終わってからは舞台から下がるはずだった。

しかし、この日のミクは音楽が止まって、拍手が続いて、けれどもまだ舞台から下がるうとしなかった。

何か迷う表情に。けれど、ふと舞台袖の方へ目を向けると、覚悟を決めたように口を開いた。

「みなさん！ これでコンサートは終わりです、本当はここで舞台袖

に去っていく事になっていました！」

予定を説明するだけにしては、必死な声だった。

何ごとかと観客たちは小さななどよめき声を上げる。

「でも、私は……初音ミクはみなさんにお願ひがあるんです！ それを聞いて下さい！」

スタッフが慌てて幕を下ろせと指示を出す。

けれど早口で、ミクは言葉を続けた。

「そのお願ひは、私のマスターを助けて欲しいんです！」

会場は静かになり、ただミクの言葉だけが響き渡る。

「マスターは今、病気で高い高い治療費が必要なんです。ミクはどんな治療が必要なのか調べようとしたけど、教えてもらえませんでした。でも、すぐくすぐくお金がかかるんだって、それだけは分かりました！」

必死の訴えだった。

「だからお願ひです。マスターを助けるためのお金を……！」

「その必要は無いわ」

マイク越しではない声が響き渡る。

舞台袖から、ナイフを手にした未来が姿を見せた。

「私はね、こういう身体なの」

そう言つて、未来はナイフを自分の腕に突き立てる。

出血の大惨事を予想して、悲鳴があがった。

けれど、血が出る事はなく、そのまま未来はナイフで己の身体を、皮膚の下から見える機械装置をあらわにして見せる。

「そう、身体を切つても血なんて出ないわ。見えるでしょ、この機械が。ミクには黙っていたけど、初音未来なんて人間は存在しない。ダンスや運動なんかの实用に耐えない初音シリーズ試作機、それが初音未来」

言つて聞かせるように、未来は説明をする。

「そして、そんな今の私に足りないのはね、ボーカライト鉱石」

ナイフを放り捨てて、未来は語る。

「私が作られた当時の技術では、ボーカライト鉱石の精錬が不十分で、激しい運動ができるだけのエネルギーが確保できなかった。その上、稼働時間に制限付き。だからそう、新しいボーカライト鉱石さえ手に入れば私は元気になれる」

ミクは言葉を失っていた。未来を人間だと信じきっていたために。「分かる？ アナタが犠牲になれば私は……初音未来はまだまだ動ける。生きていける」

そんなミクを、未来は暗い笑みで見つめた。

「私のために犠牲になってくれるかしら？」

例え、どんな事をしてでも。そんな雰囲気未来は持っていた。けれど。

「はいっ。そんな単純な事だったんですねっ」

ミクは驚きから解放された瞬間、パンツと手を合わせて、嬉しそうに答えた。

「……単純？ そう、どうせアナタの感情なんてそんなものなんだ。だったら、生きていたいと感じるやっぱり私が壊れるなんて間違ってる。私が自由にならないなんて間違ってる！」

「……マスター」

「なによ……」

ミクは未来へと歩み寄ると、そっとその体を優しく抱きしめた。

「えっ……」

「私にとって、マスターは大切な存在です。どうしてか分かりますか？」

「プログラムで設定されているからでしょう」

「名前をくれました」

「ちょっとだけ首をかしげて、ミクは言葉を続ける。

「初音ミクという、名前をくれました」

思い出すように、優しく柔らかく言葉を紡ぐ。

「失敗をした私に、文句を言いながら手助けしてくれました」

未来はその表情が見えない。けれど、微笑んでいるだろうと感じ

取れる。

「色々な事を教えてくれました。嬉しい事、悲しい事、辛い事。えへへ、ちよつと大変な事の方が多かったかもしれません」

「いたずらっぽいその台詞は、普段の大人しいミクが言わないような台詞だった。」

「でも私は、初音ミクとして生まれてきた事に感謝していますっ」

「一つ一つの言葉が強い感情を込めて紡がれる。」

「マスターに出会えて、たくさんの人達に出会えて、こつやっってお話できてっ」

涙がこぼれ落ちた。その感触に、未来は思わず身体を固くする。

「それがどんなに大切で、どんなにかけがえのない出来事か、消えちやいそうなマスターには理解できるはずですっ」

「……………」

未来は、言葉を失った。ただ、ミクの言葉に耳を傾けるしか、なかった。

「今が大切だから、生まれてきた事が嬉しいから、だからそれを、それだけ大切なものだから。そんな大切に思える心くれたのがマスターだからっ。私はその大切な思い出を、大切な世界を失つてもマスターを助けたいんですっ」

「ミク、アナタ……………」

その時になって、未来はようやくミクの気持ちに気づいた。

いつもいつも、当たり前のように感謝の言葉を紡ぐミク。

それは常に本当の本気の言葉で、お世辞なんて欠片も入っていない真摯な言葉。

未来は言葉を探した。何か、ミクへ言うべき必要のある言葉があるはずだった。

しかしその口が開かれようとした時、警備員は未来の身体を取り押さえる。

「っ、離してっ。ミクと話をさせてっ」

「さようならですね、マスター。もう会えないのは寂しいですが、

起動停止は怖いですが……」

ミクは静かに呟く。

「ありがとうございます。さようなら……さようなら……サヨウナラ……」

「ミク……！」

こうして舞台に幕が降りる。

ミクの願いを残して。

それからのしばらくの間の事を、未来は良く知らない。

発作という故障が起きたのが原因でもあるし、ミクが謎の起動停止をして再起動する事が無いと聞かされたからでもある。

ミクがスクラップになるのならば、その素材で未来は生き長らえるだろう。

けれど、ミクが望んだその結末は観客が許さない。

助かるために他人を犠牲にする、その事はいくら仕方がないと理解していても感情が許さない。

事件を知った人々は未来へ批難の声を上げた。

未来が助かる事をよしとしなかった。

だから、ミクは再び新しく生まれ変わる事になり。

未来はミクとの関わりを禁じられる事になった。

フードとサングラスで自分の姿を隠した赤い髪の機械の少女は道を歩く。

すれ違う人々は誰も彼女に気を留めない。

テレビではミクが歌い踊って人気を集め、未来は姿を隠して存在しないかのように振舞う。

ミクへと激情を向ける原因となった、存在する事の意味や、どちらが本物かという問題も、こうなってしまうては終わった事ではなかった。

存在するだけで憎悪の対象となる、そうなっても生きていたかった未来は、結局長く生きる事を許されずただ憎しみを受けただけ復活したとされるミクは、同じパーツが使われただけの単なる同型品。

「……機械に魂って宿るのかしら」

研究所の私室へと戻り、ベッドへ腰掛けてミク用だった空のベッドへ目を落とす。

「もし、魂が宿るなら、再びあの子があの子として生まれてくれますように」

今の未来は発作が起きてもメンテナンスは行われない。

壊れたなら、もうそれまでの存在。

研究員の中には同情的な者もいたが、それもわずかで、上の決定を覆す程ではない。

ミクへの願いを込めて、未来はベッドへ横になる。

最後に手入れをしたのはいつだったか、もう覚えていない。

テレビもつけたままで外出をしていた。

電源を消そうと手を伸ばしたその瞬間、ミクの顔が映り、手が止まる。

「ミクちゃんの大切な物って何かな？」

「はいっ！ 私が生まれてからずっと大事にしていた宝物です！」

そう言っつて、ミクは三毛猫のフィギュアのついたキーホルダーを取り出す。

「これを見ると、不思議な気持ちになれるんです」

「不思議な気持ち？」

「はい！ まるで私そっくりな、イジワルで、でもすごく優しい赤い髪の女の子を思い浮かべるんです」

「えっと、それは……」



事件の事を知っているのだろう、レポーターは戸惑ったように口を濁す。

けれどミクは嬉しそうな声を止めずに続ける。

「この事は誰に話しても忘れろって言われます。でも、その子の事を考えると、どうしても会いたくて」

「……会いたいの？」

「はいっ。会って、安心させて、泣き止んで欲しいと伝えたいんです！」

未来は、自分が泣いてる事に気づいた。

今のミクは偽物だと想い続けていた。

けれど、違った。

未来の事が大好きな、ミク。

そんなミクの事が好きで、でも信じきれていなかった未来。

考え事をしていると意識はテレビから少し離れる。

そして電話が鳴った。

それを手に取り、未来は口を開く。

「……もしもし？」

「あ、未来さんですね。今からミクさんと一緒にインタビューを受けて頂けませんか？」

テレビでは、レポーターが何やら電話をしている。

その相手が自分だと気づいた時、未来は自分が終わる前に一つの希望と出会う事ができた事を知った。

(後書き)

これがハッピーエンドなのか、バッドエンドなのかは読んでいただいた方それぞれの判断にお任せします。これからも色々と作品を投稿していきたいと思しますので、応援よろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9229q/>

---

二つの未来

2011年2月14日20時25分発行